（別紙２）　　審査の結果の要旨

氏名　川上　知里

本論文は、『今昔物語集』（以下、『今昔』）につき、その内部構造と同時代の説話・唱導資料との二つの側面からの分析により、その文学史的意義を究明するものである。序章・終章のほか、本論は二部に分けられ、計十章および一つの付論によって構成されている。

第一部は『今昔』の内部構造を扱う。第一章は各説話の冒頭部の意義を分析し、そこに強い構成意識を見出した上で、冒頭部が結語と相まって多面的で自由な説話表現を可能にしていることを指摘する。第二章は巻十「震旦付国史」に注目し、これが中国正史の構成に倣い、その影響が天竺・本朝非仏法部に及んでいることを確認し、なおかつ本朝部の魅力ある表現の創造をも促していることを解明する。第三章は『今昔』における「恐怖表現」への傾倒が、ときに編集方針をも揺るがすまでに至ることを指摘し、従来未解決であった巻九の編成の混乱が、冥界への興味とともにその傾倒に起因することを明らかにする。第四章は『今昔』巻三十を、『世継物語』のごとき男女関係を題材として非仏法的世界を描くことを目指した巻であると規定しつつ、編者の仏法的価値観が混入したために性格の曖昧な巻になってしまった、と指摘する。第五章は『今昔』仏法部における信憑性確保のための諸方法を整理した上で、その背後には、当時の舎利信仰に端的に現れる、絶対的存在として生身の釈迦仏の不在を意識する末法思想があると考察する。続いて第六章は非仏法部の信憑性確保の様相を分析し、そこに霊験等に猜疑の目を向ける院政期の人々の合理的精神を見出し、そこから『今昔』編纂者の強い読者意識を想定する。

第二部は『今昔』の位置づけを視野に収めつつ、周辺的な作品を分析する。第一章は『世継物語』につき、王朝文化の「列伝」を目指して物語性と正確さとの二つを求め、その相克と後者の優先ゆえに、未熟な印象を与える作品となったと規定する。第二章は院政期の唱導資料と既存説話を詳細に比較し、前者に簡略化が見られることを指摘して、従来の唱導資料の把握を修正する。第三章は『打聞集』を唱導資料とする通念に異議を唱え、説話集の草案である可能性を提示する。付論は金沢文庫本『仏教説話集』につき、これが複数の唱導資料からの抜き書きであることを明らかにし、かつ錯簡を正す提案を示す。第四章は『長谷寺験記』につき、エピソードを挿入し霊験性を増幅する、また記録的な情報を付加するという二つの操作があることを解析し、同書が「長谷寺の霊験史」とでも呼ぶべき独自な作品を志向している、と論じる。

本論文は、豊富な例証をもとに、説得的な論理によって、『今昔物語集』の文学史的意義を新たに定位している。非仏法部のさらなる解明など今後の課題も存するが、本審査委員会は本論文に上記のような研究史的意義を認め、博士（文学）の学位に十分値するとの結論に至った。